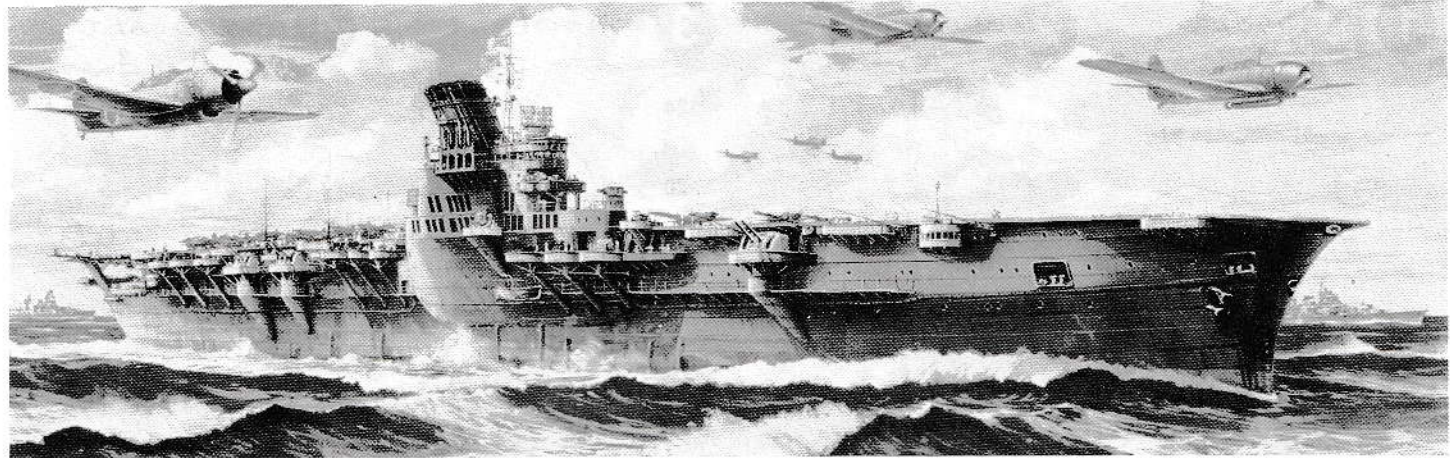


TAIHO 大鳳

ウォーターラインシリーズ NO.211 航空母艦(たいほう)

JAPANESE
AIRCRAFT CARRIER



イラストレーション・上田毅八郎

WATER LINE SERIES

航空母艦大鳳について

大正11年の12月、日本最初の航空母艦鳳翔を完成して以来、赤城、加賀、龍驤、蒼龍、飛龍と空母の建造をつづけ、着々と海上航空兵力の充実をはかってきた日本海軍は、昭和12年度の第3次海軍軍備補充計画（通称三計画）では傑作中の傑作といわれた翔鶴、瑞鶴の2隻の建造を開始した。そして、つぎの昭和14年度の第4次海軍軍備補充計画（通称四計画）では翔鶴型よりも、ひとまわり大型の3万トン級の空母を1隻建造することを決定した。第130号艦とよばれたこの新空母がのちの大鳳で、日本をめぐるアジアの国際情勢が一段と緊迫の度を加えてきた昭和16年7月10日、川崎重工神戸造船所で起工された。当時、日本海軍は前記の翔鶴、瑞鶴が最後の仕上げを急いでいたほか、潜水母艦剣崎、高崎、商船春丸、樫原丸、出雲丸の空母改装工事に着手していたが、この新空母大鳳はただ単にこれらの空母よりも大きいというだけでなく、防禦甲板を張った飛行甲板という、他の空母にない大きな特徴をもっていた。

これは、空母の生命ともいべき飛行甲板が爆撃に対して弱く、たとえ命中した爆弾は一発であっても、飛行甲板を破壊されれば、空母としての機能を失い、単なる鋼鉄の船と化してしまうという空母の宿命をカバーするための対策であり、日本海軍としては、はじめての試みであった。そして、大鳳のばあい、急降下爆撃で投下された500kg爆弾の直撃に耐えられることを目標として設計されていた。もちろん、飛行甲板全体に厚い防禦甲板を張ることは重量や重心などの面から見ても困難であるため発着艦に必要な最低限の部分だけにと防禦するという方法がとられた。具体的に説明すると、当時の艦上機は150mあれば発着できたので、エレベーターを2コとし、前後のエレベーターの距離を150mとり、この部分は発着に必要な幅だけ20mmのDS鋼板の上に、さらに、75mmのCNC甲板を張った。エレベーターは重防禦をすべしと昇降力が落ち、設計も困難になるので、25mmのDS鋼板を2枚重ねて張った軽防禦としたが、それでも、1基の重さは100トンに達したという。

飛行甲板に装甲を張ったため艦の重心は当然ふつうの空母より高くなるので、これに対する措置も必要となった。そこで、大鳳では翔鶴型よりも甲板の数を一段へらし飛行甲板の位置を下げると

いう方法がとられた。このため、飛行甲板の水面の高さは翔鶴型よりも約1.5m低く、飛龍型とほぼ同じ12.51mとなったが、格納庫が2段でスペースが減ったため搭載機は艦戦24機、艦攻艦爆24機、艦偵4機、補用1機、計53機に減少した。

3万トンの巨体にもかかわらず、飛龍型よりも搭載機がすくなくはないのは、奇異に感じられるかも知れないが、日本海軍はこの大鳳が完成したばあい、重防禦で爆撃に強いという特徴を利用し、本艦を他の空母より前方へ進出させ、他の空母の搭載機の中継基地として利用することを考えていたので、これで充分であったのである。なお、この構想はのちに超空母信濃に引きつがれている。

甲板数が減った結果、乾舷も低くなり綾波性に影響が出るので、その対策としては艦首の外板を飛行甲板までのばしたエンクロズド・パウあるいはハリケーン・パウとよばれるスタイルが採用されたが、これも、日本海軍としては最初で最後の試みであった。また、煙突は水面上の高さが低いので従来の日本空母のように側面に出すと、艦が損傷して傾斜したときに海水が浸入するおそれがあるので、艦橋と一体にして飛行甲板の中央部右側に設けるという方式がとられた。そして、そのま、では排煙で飛行甲板に影響をおよぼすため外側へ26度傾けた。この方式は一足ききに完成した隼鷹（旧樫原丸）と同一形式であるが、隼鷹は大鳳の艦橋及び煙突の設計の参考にするため、この方式を採用したといわれている。なお、右舷にこのように大型の構造物を設けたので、バランスをとるため飛行甲板の後半部は中心線を船体の中心より2m左舷によせられていた。

魚雷に対する防禦は翔鶴型とは異なり戦艦陸奥や重巡高雄型と同じ湾曲防禦縦壁式で、外板の3m内側に25mmのDS鋼板を2枚重ねて張り、その内方にさらに水防縦壁を設けてあり、缶室の部分は5枚の外板になっていた。対空兵装は戦訓をとり入れて建造中に強化され、長10cm高角砲連装6基と25mm3連装機銃22基を装備した。

昭和19年3月7日に竣工した大鳳は、ただちに第1航空戦隊に編入され、3月27日、内海西部を出発、シンガポールを経て4月6日リング泊地に到着した。4月15日、第1機動艦隊の旗艦となった大鳳は、5月16日、タウイタウイに進出、ここで決戦の日を待った。

昭和19年6月15日、あ号作戦決戦発動。小沢中将の坐乗した大鳳は翔鶴、瑞鶴以下の第1機動艦隊の精鋭をひきいて決戦にのぞんだ。搭載機は第601海軍航空隊の零戦、天山、隼星、大鳳の乗員も、飛行機の搭乗員も、この日本海軍最強の新

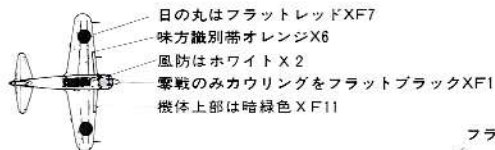
鋭空母の初陣にあたり、必勝の信念に燃えていた。しかし、決戦第1日目の6月19日、はやくも、この新鋭空母に死の手が迫っていたのである。午前7時45分、垂井少佐のひきいる第1次攻撃隊が発艦を開始した。そして、母艦をはなれた各機はつぎつぎと左旋回をして編隊をくみはじめたが、このとき、1機の彗星が僚機と反対の右旋回をしたと見る間に、海面めがけて突入していった。この小松兵曹長機の奇妙な行動に一瞬、わが目をうたがった人々は、つぎの瞬間、大鳳めがけて走ってくる6本の魚雷の航跡を発見し、魚雷に体当たりして母艦を救おうとした小松兵曹長の真意を察したのである。この6本の魚雷は、警戒網の目をさすめてしのびよっていた米潜水艦アルバコアの放ったもので、6本のうち1本が前部軽質油タンク部の外板に命中、轟然と炸裂した。3万トンの巨体は、一瞬、ショックでゆらいだが、何事もなかったように走りつづけた。さすが、不沈空母大鳳と、乗組員も、僚艦も、安堵の胸をなせおろしたが、このショックで前部エレベーターが故障し、第2次攻撃隊の零戦をのせたまま途中で停止してしまったため、軽質油タンク上部甲板の接手がゆるみ、ガスが格納庫内にもれはじめたのである。そして、悲劇は、第2次攻撃隊の発進と第1次攻撃隊の収容のため前部エレベーター孔をふさいだ直後に発生した。出口をふさがれたガスは、次第に艦内に充満していった。そして、午後2時32分、ガスに引火、大爆発がおき、またたく間に3万トンの巨体の内部は火の海と化してしまった。消火装置はすべて破壊されてしまい、手のほどきようがなかったという。同日夕刻、次第に左に傾斜していった大鳳の巨体は、北緯12度22分、東経137度4分のマリアナ西方の海面に姿を没していった。

防禦に重点をおき不沈空母といわれた精鋭空母としては、まことにあっけない最後であった。

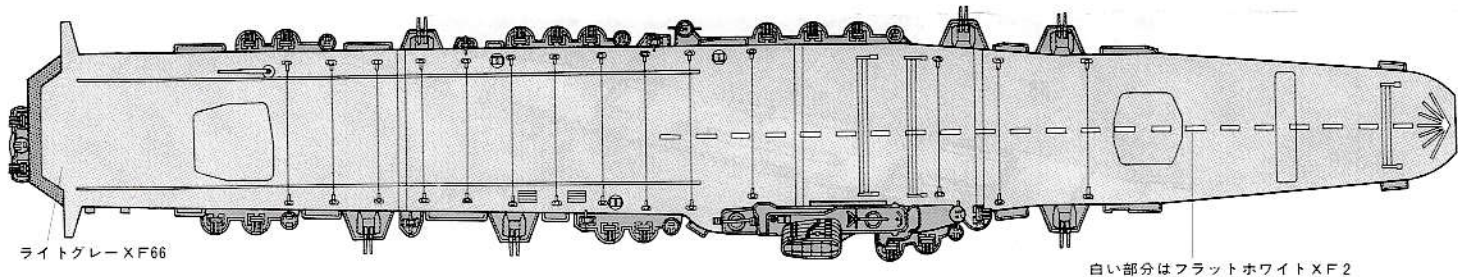
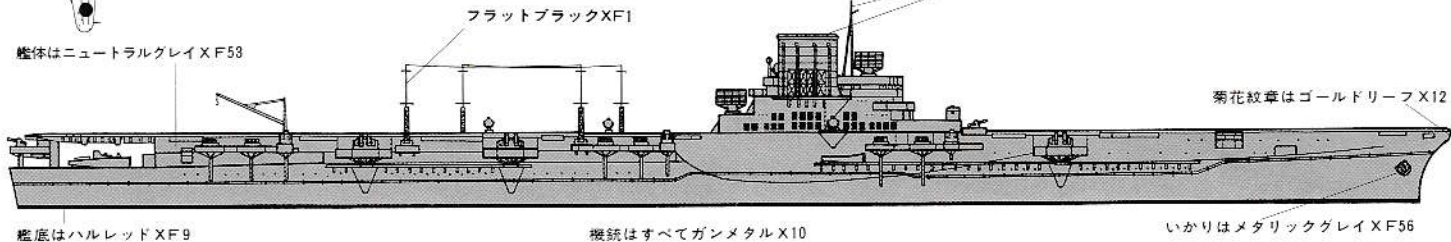
なお、本艦以後の空母は、いづれも他艦種からの改造艦あるいは、既製空母の図面を流用したものであり、その運命ははかなかったが大鳳は日本海軍が鳳翔型以下の空母建造技術の粋と用兵上の経験のすべてをつぎこんだ日本空母の決定版ともいべきものであった。

大鳳主要々目

基準排水量	29,300トン	公試状態	34,200トン
水線長	253.00m	最大幅	27.70m
力	160,000馬力	速力	33.3ノット
搭載機数	常用52機	補用	1機
飛行甲板	長さ257.5m	幅	30.0m
完成年月日	昭和19年3月7日	川崎重工神戸造船所	



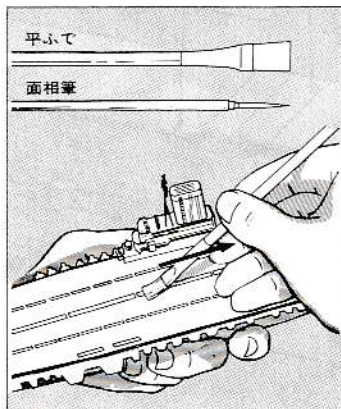
PAINTING



《塗装について》

同じ色に仕上がる部品はできるだけ組立てて、部品の合せ目や、はみだした接着剤を修正してから塗装するのがコツです。

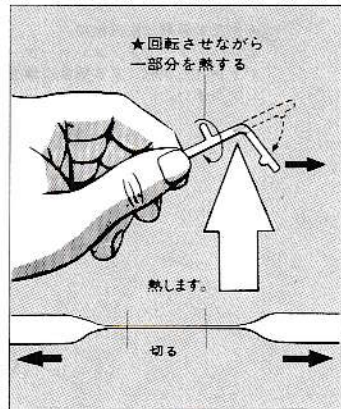
筆塗り塗装には簡単でむらなく塗れる、タミヤカラーエナメル塗料が最適です。甲板や船体下面のように広い部分は平筆を使い、イベントツや飛行機などは、細筆を使います。塗料は筆でこすらないようにしましょう、塗装する面におくようにして塗るのがコツです。厚くぬられた塗料も乾燥すれば彫刻線の消える心配はありません。



《アンテナ線の作り方》

キットをより引きたさせる為にアンテナ線をはりましょう。必ずキットを塗装してからおこないます。まずランナー〔部品が付いていた枝〕を適当な長さに切り、ローソクの炎で右図の様にやわらかくなるまで熱します。十分熱したところでローソクから離し、すばやく引っぱると細い糸ができます。上の2面図を参考にして接着部分より糸を少し長めに切り、マッチ棒の先に接着剤をつけてアンテナに止めます。のこりは接着剤が乾いてから切るのがコツです。

(セロテープ等でマスキング塗装をして下さい。)



TAIHO大鳳

《作る前にお読み下さい》

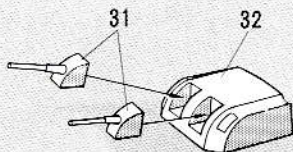
★お買い求めの際、また組み立ての前には必ず内容をお確かめ下さい。万一不良部品、不足部品などありました場合には、お買い求めの販売店にご相談下さい。なお組み立てを始

められた後は、製品の返品、交換などに応じかねます。

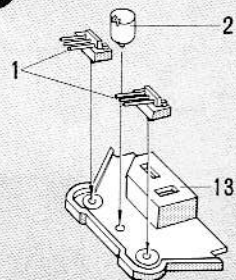
★タミヤからはビン入りの接着剤タミヤセメントが別売されております。モデルをきれいに仕上げるタミヤセメントをお使い下さい。

1 高角砲のくみため

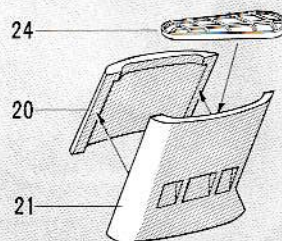
6組作ります。



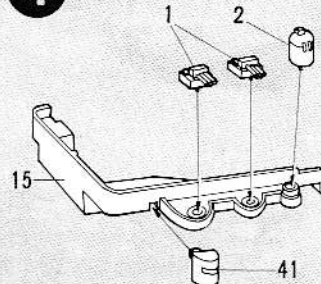
2 機銃座のくみため



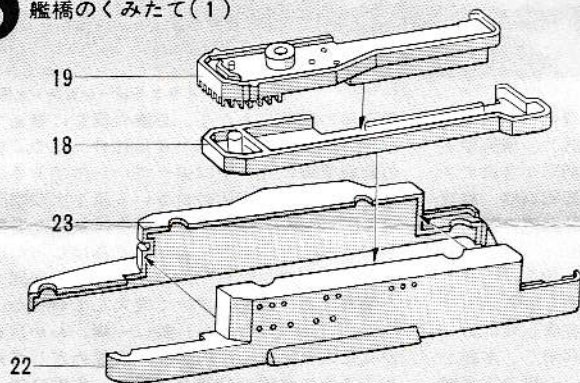
3 エントツのくみため



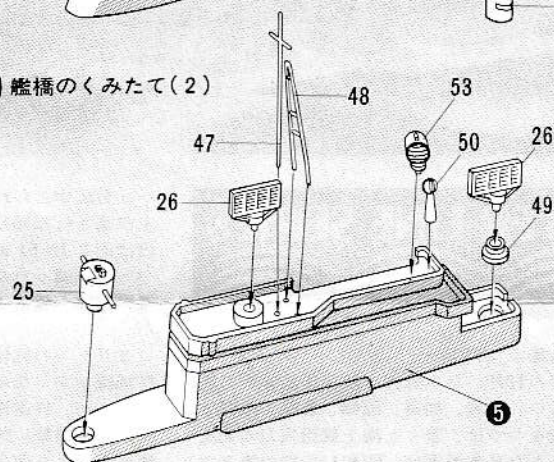
4 艦体後部のくみため



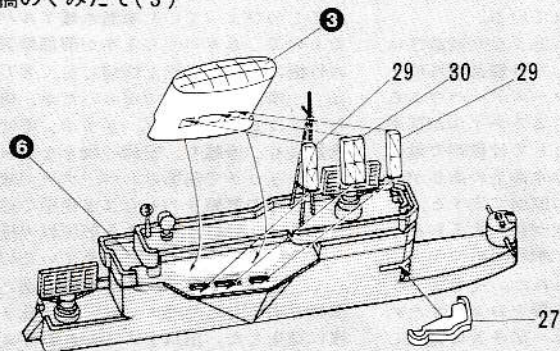
5 艦橋のくみため(1)



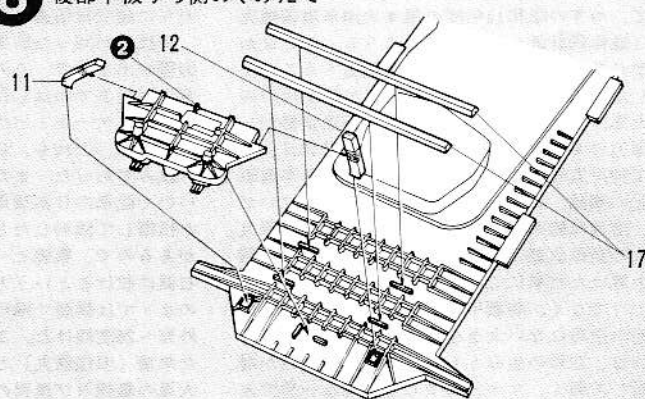
6 艦橋のくみため(2)



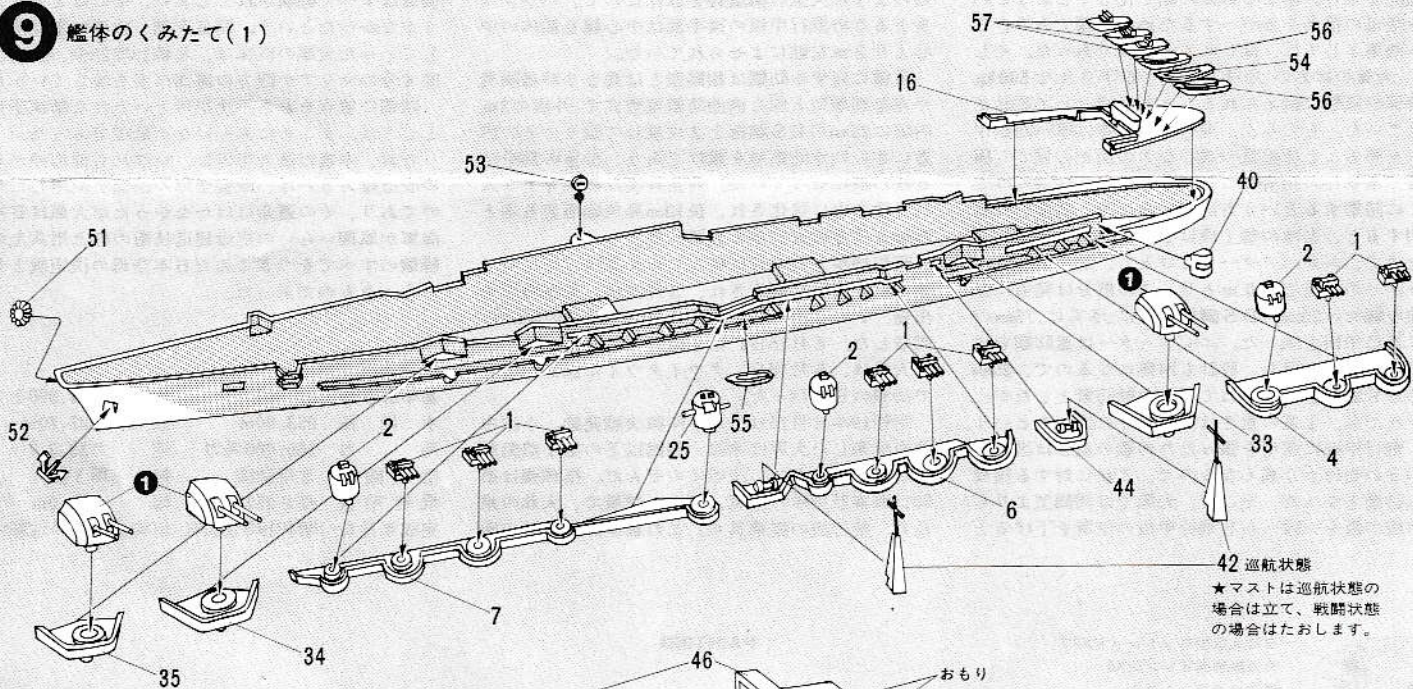
7 艦橋のくみため(3)



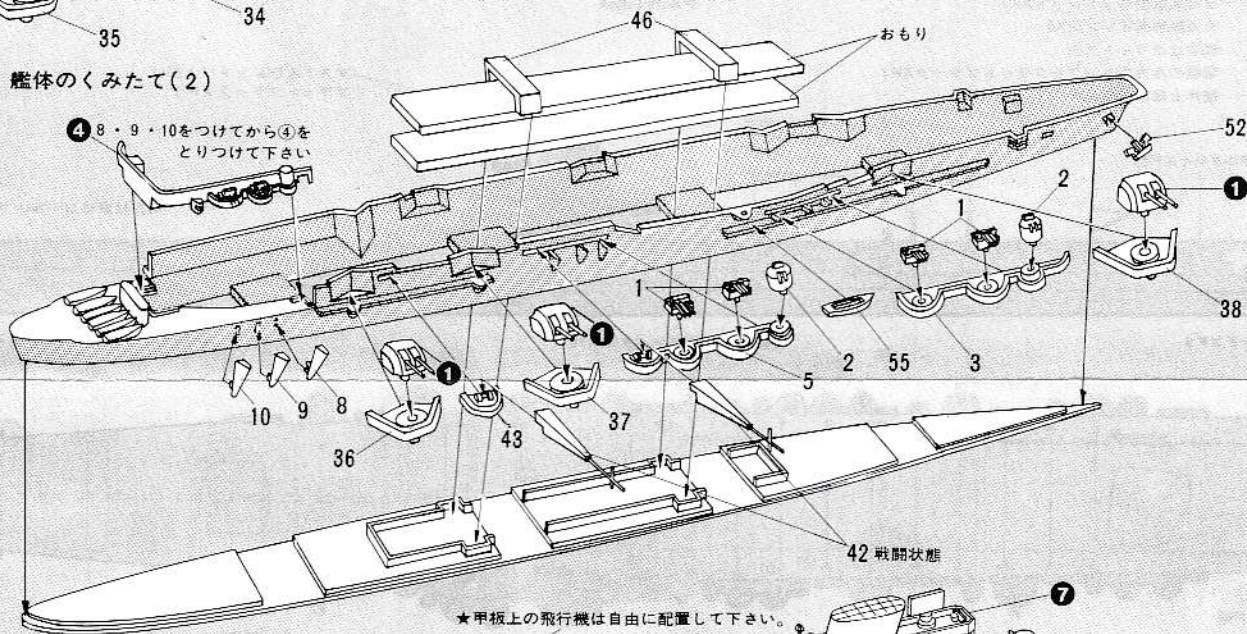
8 後部甲板うら側のくみため



9 艦体のくみたて(1)



10 艦体のくみたて(2)



11 艦体のくみたて(3)

